台湾留学で中国語漬け 意欲的に行動して充実

文学部人文社会学科中国言語文化専攻３年
和田（わだ） 鮎子（あゆこ）（私立田園調布学園高等部）

台湾のホストファミリーと友人たち
（筆者右から２番目）

私の時間割には「中国語会話」「中国文化講義」といった具合に「中国」という文字がびっしり並んでいる。中国語漬けの日々だ。中国言語文化専攻では中国の言葉、芸術、歴史など多角的なアプローチで中国への理解を深めることができる。今でこそ毎日楽しく勉強しているが、そのスタートは憂鬱なものだった。この専攻の1年生は毎日のように中国語の授業がある。授業は少人数クラスで綿密で丁寧な指導を受けられるため、本来なら私のように初めて中国語を学習する人でも1年で基礎を習得できる。しかし、語学への強い苦手意識から中国語に関心を持つことができず、授業へ行かなくなってしまった。好きな分野の勉強や、入ったばかりの管弦楽部の練習の方が魅力的だった。当然、1年生の中国語の単位はすべて落とした。

そんな私が中国語と向き合ったのは1年生の春休み。1カ月間台湾へ留学した。当時の語学力を考慮し日本語が通じるステイ先へのホームステイを選んだ。しかし、渡航後絶望することとなる。通じない日本語。もっと通じない私の中国語。食事の代わりに机の上に置かれる100元札。ホストファミリー全員が平日の夜遅くまで働いていたため、朝から晩まで1人ぼっち。「生活しなきゃ！」という危機感により1年間の遅れを取り戻し、3週間目には台湾人と間違われるほど現地へ馴染んでいた。また、休日にはホストファミリーのお母さんと料理を教え合ったり、お姉さんと台北市内を観光したり、お兄さんと辞書や筆談を駆使しつつ夜通しお喋りしたりすることで家族同様に仲良くなった。こうして現地の人と言葉が通じる楽しさが、次第に中国語への苦手意識を和らげていった。

帰国して、新学期が始まった。2年生の授業を受けつつ、1年生の教室で中国語を再履修した。再履修した授業では現地の文化や言語のニュアンスの違いなど教科書には載っていない中国の魅力を教えてくれていたことに初めて気が付いた。渡航経験の豊富な中国言語文化専攻の先生方だからこそ知り得る情報が満載だった。2年生の授業では日本語に頼らずに中国語の情報から中国を知ることを学び、現地の言葉を通して獲得する生の中国へ心が惹かれるようになった。2年生の授業と再履修と部活動をこなすのはハードだったが、クラスメイトであり管弦楽部の仲間でもある友人が支えとなってくれた。中国語を愛してやまない彼は、チャイナタウンで中国人のふりをして買い物をしたり、中華料理屋で中国人店主に中国語で話しかけたりと、日本で中国を楽しむ方法を教えてくれた。現地渡航とはまた違う、新鮮な楽しさがあった。

その後も何度か台湾へ旅行して中国語の自信をつけた私は、2年生の春休みに上海へ短期留学した。伝えたいことが上手く言葉にならず悔しい思いをした。しかし、失敗しつつも専攻で身につけてきた文化や歴史の知識を現地で反映できることに喜びを感じた。帰国後、履修した授業は中国語会話と中国文化がメインだ。中国語から逃げていた1年生の自分は何だったのだろうか。このように自分で限界を設けずに大胆に行動することで中国言語文化専攻の学生として充実した学びができたと思う。これからも意欲的に行動し、中国に対する理解を深めていきたい。

上海留学

の
レな！
生活
vol.6
の様子を掲載し、ご父母のヤンパスライフの風景、また
の情報を発信いたします。

文学部生

リアル学生

文学部生のリアルな学生生活
皆様に文学部生の充実したキ
文学部ならではの取り組み等

就活中にもかかわらず多くのゼミ生が集合しました！
（小林ゼミ・筆者前列左端）

近世史と考古学に興味 物事を深く掘り下げる

文学部人文社会学科日本史学専攻４年
宮尾 光（みやお ひかる）（私立中央大学杉並高校）

私たちの暮らしと日本の歴史との距離は思いのほか近く、「御朱印ガール」や「戦国武将ファン」といった時々の流行や、ニュースで報道される新しい史実の発見やバラエティー番組など、私たちの暮らしと日本の歴史との関わりを目にする機会は多くあります。では学問としての「日本史学」は果たしてどのようなことをしているのか。私が入学以来過ごしてきた文学部人文社会学科日本史学専攻についてお話ししたいと思います。

日本史学専攻には考古学・古代・中世・近世・近代・近現代の各分野の教授がそれぞれ在籍しており、そこから自分が興味のある時代を専攻することができます。この中で特長的なのが、考古学が日本史学専攻の中に組み込まれている点です。他大学だと考古学は独立して考古学専攻となっていることが多いのですが、中央大学では考古学が日本史学専攻の中に組み込まれています。考古学というと土器や土偶といったイメージが強いかもしれませんが、そのフィールドは縄文時代や弥生時代といった時代に限らず、近世考古学などに代表されるようにより現代に近い時代まで及びます。このような点から中央大学の日本史学専攻ではより広い視野で日本史学を見渡すことが可能となっています。

そんな日本史学専攻での４年間の学びの最終到達地点は卒業論文になります。そこに向けて１年次から段階的な準備を行っていきます。まず、１、２年次は日本史の流れを捉えることを目標にさまざまな時代の史料に触れ、基礎知識を蓄えていくと同時に自らの興味関心を持てる時代を探していきます。３年次から自分の興味のある時代のゼミナールを選択しその時代の専門性を高め４年次で卒論制作に取り組みます。

私自身は１年次にクラスの担任をしていただいた山崎圭先生の専門分野である近世史に興味を持ったほか、１、２年次の授業を通じて小林謙一先生の専門である考古学にも興味を持っていたため、３年次に近世史ゼミと考古学ゼミに所属し、４年次現在は小林先生の下で卒論制作を行っています。ここでは近世史ゼミと考古学ゼミのそれぞれのゼミの特色について紹介します。

はじめに近世史ゼミの特色は古文書を用いた授業を受けることができる点です。普段は古文書のコピーを用いて授業を行っていますが、ゼミ合宿などの機会には実際に本物の古文書に触れることができ貴重な経験をしました。古文書に書かれている崩し字を読めるようになるまでには時間がかかりましたが、江戸時代の人々が書いた書物を読むことで当時のよりリアルな姿に迫ることができる点は非常に興味深いことなのではないかと思います。

次に考古学ゼミですが、このゼミの特色は何といっても発掘調査を体験することができる点にあると思います。昨年度は神奈川県相模原市の大日野原遺跡や東京都三鷹市の滝坂遺跡といった遺跡で発掘調査を行いました。発掘調査自体がそうそう体験できるものではないですし、本物の縄文土器の破片を取り上げることができるのは魅力的だと思います。

大学は自分の「やりたいこと」が思いっきりできる場所です。しかし「やりたいこと」は誰かが与えてくれるものではありません。私自身、入学当初は何をしたいか漠然としていましたが、今となっては自分の興味関心や、やりたいことがはっきりとしています。それは１、２年時のしっかりと基礎を積み上げたことに加え、なぜ？どうして？という様々な目線を持って物事を掘り下げていくことができるようになったからではないかと感じています。

日本史の知識を深めることができる点に加え、物事を深く掘り下げていく力を養うことができる点が日本史学専攻の学生ならではの強みと感じています。これらの強みを原動力に残り卒業までを精一杯過ごせたらと思います。

発掘調査の様子（大日野原遺跡）